

常照

第 856 号

『聖人のつねの仰せ』

春の日差しが温かく感じられるようになりました。

さて、表題の言葉は「歎異抄（たんにしよう）」という御書物に出てくる言葉です。

「歎異抄」は、真宗の念仏の教えを信じる人たちの中で、親鸞聖人（しんらんしょうにん）の教えと違うことを言うものがでてきたため、聖人の正しい教えを残そうと、唯円（ゆいえん）とい

うお弟子が書いたといわれています。

著者は、「耳の底に留むるところいささかこれをしるす」耳の底に残って忘れられないものを、少しばかり書き残します」といっておられますから、親鸞聖人から直接お聞きした教えを書き残した、いわば親鸞聖人の語録といえるでしょう。

間違いをただすとか邪説（じゃせつ）を改めるというのではなく、同じくお念仏を申しながら、聖人の正しい教えを見失っている同朋への著者の深い悲しみと願いが「歎異抄」に「異なることを歎（なげ）く」という書名に表されています。

内容は序文・師訓（しくん）編

といわれる一十條・歎異編といわれる十一〜十八條・後序で構成されています。

その中、『聖人のつねの仰せ』は、後序に述べられています。

『聖人のつねの仰せには、「弥陀の五劫思惟（ごこうしゆい）の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ』と書かれています。

現代語訳では『親鸞聖人がつねづね仰せになっていたことですが、「阿弥陀仏が五劫もの長い間思いをめぐらしたてられた本願をよくよく考えてみると、それはただ、この親鸞一人をお救

いくださるためであった。思えば、このわたしはそれほど重い罪を背負う身であったのに、救おうと思ひ立ってくださった阿弥陀仏の本願の、何ともったいないことであろうか』となります。

「つねの仰せ」とは、つねづね、いつも仰っておられた、ということでしょう。

続いて「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」とあります。「弥陀の五劫思惟の願」とは阿弥陀さまの本願のことです。阿弥陀さまは十方（じつぽう）の衆生（しゆじょう）をすべて救おうとなさって、四十八の願を建てられ、そのすべてを成就（じ

ようじゆ)されて仏さまとなられた。私たちの救いが阿弥陀さまの本願によつて完成されたのです。ですからここは「弥陀の本願を案ずるに」と言つてもいいのですが「弥陀の五劫思惟の願」とあえて仰つておられます。

「劫」とは時間の長さを表しますが、いろいろな説があるようですが、限らない時間といえるようです。それが五回分ということです。この五劫は「五逆罪(ごぎやくざい)」に対応しているとも言われています。

「五逆罪」とは正法誹謗とともに仏教で一番重い罪であるといわれています。阿弥陀さまの中心の願である第十八願にも「五逆と誹謗正法(ひほうしようぼう)

を除く」とあります。

五逆とは、

一、父を殺す、

二、母を殺す、

三、仏教の聖者を殺す、

四、仏の体を傷つけ血を流させる、

五、仏教徒の和やかな集まりを破る、

の五つの罪です。

親鸞聖人が「弥陀の本願」と言わず「弥陀の五劫思惟の願」と仰つたのは、ご自身を五逆罪の罪深きものと見ていらつしやつたのではないでしょうか。実際に両親を殺害したり仏を傷つけたりしてはいないが、心の中では親を親とも思わない仏を仏とも思わないような、そんな恐

ろしい私・親鸞である、という深い懺悔(さんげ)なのでしよう。続いて「このわたしはそれほどに重い罪を背負う身であったのに、救おうと思いい立ってくださった阿弥陀仏の本願の、何ともつたないことであろうか(現代語訳)」とあります。

阿弥陀さまの智慧の光によって我が身の愚かさ・罪深さが思い知らされた、その私を救おうとされたお慈悲の何と有難いことよという、親鸞聖人の慚愧(ざんき)と歓喜(かんぎ)のお心が、『聖人のつねの仰せ』という唯円さんの言葉によって伝えられているのです。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

五月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 五月七日(水)〜十一日(日)

熊本教区 託麻組 良寛寺

講師 吉村 隆 真師

○後期 五月十三日(火)〜十六日(金)

北海道教区 留萌組 西暁寺

講師 藤 法順 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)〜

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話を
して頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、
ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気
実施の上、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号

本願寺小樽別院

電話 (一三四) 二二一〇七四四番
FAX (一三四) 二九一四〇八〇番
テレホン法話 二七一六一六番